

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 29 日現在

機関番号：10101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26570023

研究課題名(和文)ピクチャレスクな川下りからサブライムな山岳観光へ

研究課題名(英文)Boating Trips down Picturesque Rivers and Tourism in Sublime Mountain Scenery

研究代表者

西川 克之(Nishikawa, Katsuyuki)

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：00189268

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：観光は社会の近代化によってもたらされた諸条件を前提としてはじめて成立したものである。多様な観光現象の分析を試みる際には、そうした諸条件への参照に常に立ち返る必要があると思われる。本研究課題では、近代社会が本格的に展開し始めた時代のイギリスにおいて、絵画というメディアによって誘発され、そこに描かれたイメージを手本として自然景観に美的感興を見出していこうとする観光行動に、近代観光のひとつの原型的なモデルがあるとの仮定に立ち、またそうしたあり方が観光の大衆化とそれへの反発というジレンマとも密接に関連していたという枠組みのもとで、実際の観光現象の分析に応用することを試みた。

研究成果の概要(英文)：Tourism has been established as social custom only on the various conditions brought about by the modernization of society. We seem to have to refer to these conditions when we try to analyze each tourism activity. In the times of full-blown development of modern society, England showed a tourism culture in which middle-class people began to seek out examples of natural scenery similar to the descriptions in the Italian landscape paintings. In this paper, applied analyses are attempted on the premise that such tourism practices are one of the model case of modern tourism phenomenon and that they had a close relationship with the dilemma between popularization of tourism and criticism against it.

研究分野：観光研究

キーワード：ピクチャレスク サブライム メディアと観光 観光の大衆化 近代化と観光

1. 研究開始当初の背景

(1)イギリスにおいてピクチャレスクの美意識が理論化されたのは18世紀末のことであるが、その美意識が社会的事象として具現化した例のひとつとして、自然風景を求めてワイ川を下るピクチャレスク・ツアーが挙げられる。このようなピクチャレスク・ツアーが18世紀の新古典主義的な「遊び」の要素を含んでいるとすれば、一方で、19世紀に入って中流層によって楽しまれるようになる、サブライムな山岳風景を求めてスコットランド高地地方やアルプスにまで遠征していくことになるツーリズムには、ロマン主義的生真面目さが浮き彫りになっている。その代表とも言えるジョン・ラスキンはアルプスの景観を「ロマン主義的なまなざし」の対象として神聖化し、徐々に大衆化していく観光登山に対して手厳しい批判を展開していくことになる。

(2)翻ってみればこの時代にはまた、商品化された文化が本格的に市場に流通し始めたのであり、ツーリズムの社会的浸透もそうした流れに掉さすものである。こうした文脈に置いてみるならば、ピクチャレスク・ツアーは市場化していく観光実践の端緒を開くものであり、半世紀ほど先にあるトマス・クックによるパッケージツアーの商品化に連なっていく要素をはらんでいると同時に、ピクチャレスクからサブライムへ、新古典主義からロマン主義の思潮へという移行は、商業化による文化の社会的拡散とそれへの反発という近代社会に極めて特徴的なダイナミクスと相互的に関連するようと思われる。

(3)こうして、近代社会における観光の大衆化とその批判という系譜は、メディア化が進行するにつれて定型化していった観光のまなざしの社会的拡散と密接に関わっているのではないかという論点が、本研究を着想するに至った背景をなしている。

2. 研究の目的

上述のように、イギリスを例にとってみると、ツーリズムはその成立の当初から、大衆化への方向性とそれとは逆の大衆化批判を内在させていたと考えられる。本研究においては、18世紀後半のイギリスで行われはじめたピクチャレスク・ツアーと、それと相前後して実践され始め、後にアルプス登山という形で本格化していく山岳観光の展開に、ツーリズムの大衆化と大衆化批判の淵源を求めることができるという仮説を立て、文化の商品化、視覚メディアの一般化、空間的移動性の高まりといった、さまざまな社会的条件のもとで近代ツーリズムが発展していく際のダイナミズムの一端を観光文化論の論点に立って明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

当初はまずイギリスにおけるピクチャレスク理論およびサブライム美学理論について文献に基づいてまとめた上で、ピクチャレスク・ツアーやサブライムの美意識に支えられた山岳観光の実践について、当時の旅行記や案内書などの一次資料を入手するためにイギリスに現地調査に赴く予定であったが、ほかの業務を優先せざるを得なかった事情もあり、当該の現地調査は実現できなかった。それに代わって、メディアによって誘発された観光という、ピクチャレスク・ツアーやアルプスの山岳観光と同様のコンテキストで分析が可能な事例を、20世紀後半の北海道に求めて、現地調査を含めて実践的な応用研究を試みた。

4. 研究成果

(1)本研究においてはピクチャレスクやサブライムといった、芸術あるいは文学の領域では特にロマン主義の思潮との関連で繰り返し論じられてきた理念を取り上げ、それを観光研究に応用することを試みた。芸術や文学と観光の関係については、絵画や写真における観光地のイメージ化とそのオーセンティシティーの問題、あるいは小説や旅行記で描かれたエグゾチックな場所の表象や言説の問題といった論点を記号論や社会的言説分析の立場から考察したものをはじめとして研究が展開されてきたが、ロマン主義的美学理論が観光に与えた影響に焦点を当てた本研究のアプローチは、今後さまざまに応用が可能であると考えられる。

(2)観光は余暇活動である以上、楽しみや遊びの要素を本質的に伴う。一方で、19世紀のイギリス社会はピューリタニズムに由来する社会秩序の維持向上を目指す意志や合理性を追求しようという意欲も顕著であった。こうして近代的観光は誕生した時点で既に、楽しみや喜びという享乐的要素と合理的な意味付けという統制的要素をジレンマとして抱え込んでいたことになる。こうした本研究の分析の視点は、ラスキンやヴォルフガング・シヴェルプシュらに端緒を發し、ダニエル・ブーアスティンを経て定式化していく、オーセンティシティーを指向する本格的な旅と大衆化した疑似的経験で満足する観光という二項対立的図式の淵源を、観光の近代化が進展し始めた当時の美学や文学の理論との関連で説明するというこれまでにはなかった成果をもたらすものである。

(3)ジョン・アーリ以来、観光のまなざしの対象となる景観が社会的・文化的に作り出されるものであるということは、観光研究の領域においては常識となっているが、北海道美瑛町における丘の景観の場合はその典型であると言える。つまり、耕作地の幾何学模様のパターンが織りなす丘陵景観を求めて観光客が大挙して訪れるなどということは、か

つては考えられない出来事であったが、1970年代はじめに発表された美瑛の農村景観の写真作品や、また同じころ放映された自動車のテレビコマーシャルの影響を受けて、「美瑛の丘」が特定の意味を有した景観として発見されていった。かくして写真やコマーシャル映像という視覚メディアによって引き起こされた観光においては、美瑛の丘は単なる物理的な地勢であることをやめて、観光のまなざしの対象として記号化されていくことになる。さらにまたその記号には、「ここではないどこか」という旅行者の希求に合致し、「日本のようではない」「ヨーロッパ的な」として外在化され、非日常的で特別な意味を付与されていくことにもなる。

こうしてメディアに媒介されたイメージによって美的価値が創出されていくというプロセスは、クロード・ロランやサルバトル・ロサらの画家の手になる風景画に描かれた景色を、実際の自然の中に求めて楽しもうとして始まったピクチャレスク・ツアーのあり方との類推が成り立つと考えられる。絵で見たのと同じ風景を求めて川下りのツアーに参加した教養ある趣味人のまなざしは、前田真三らの写真作品や、テレビコマーシャルの中に切り取られた映像を通して、美瑛の丘に向けられるようになったまなざしと、時代や社会の違いを超越して二重写しになっていると言える。

こうした「北海道らしい」とか「ヨーロッパ的な」というように様式化されたイメージを、眼前の風景に重ねて景観の美しさを認識する観光のあり方は、実は極めて深刻な問題を抱えている。すなわち、営農活動に直接的な損害を与えかねない一部の観光者の振る舞いという問題である。それは、威風堂々とした神聖な自然景観を大衆化した観光が冒瀆的に汚しているという、ラスキン流のロマン主義美学に基づいた理念的な批判とは違った角度からの批判を惹起せざるを得ない。なぜならそうした美しい景観は、もちろん手つかずの自然とは対極にあり、また、観光という気楽な娯楽活動とも二極構造をなしている、質実な営農者たちの労働の場なのであるから。こうした観光と農業をめぐる矛盾・対立は、この地域に特有の「波状丘陵」という地勢的条件も相まって、観光の大衆化や国際化が進むにつれてますます先鋭化しつつある。

こうした状況を打開するためには、観光という大衆化した近代的慣習が生起する文化的背景や社会的条件を分析する視点が不可欠であると判断されるが、本研究が枠組みとして示した、(A)近代社会における観光の大衆化とその批判という構図は、メディア化が進行するとともに定型化していく観光のまなざしの社会的拡散と密接に関わっている、(B)文化の商品化、視覚メディアの一般化、グローバルな展開も含めた空間的移動性の高まりといった社会的条件のもとで近代ツ

ーリズムがダイナミックに発展していくという論点には、問題解決に結びつけていくための、一定程度の応用的価値があるものと考えている。

(4)いま北海道ニセコ地区にはかつてなかった規模で外国人観光客が押し寄せてきている。こうした急激なインバウンド観光の隆盛は、極端な商業化によるバブル的な不動産価格の上昇、道路を含めたインフラや除排雪、交通機関や駐車場といった面での対応の遅れ、ゴミ箱の設置やごみ収集の混乱といった数多くの社会問題を引き起こしている。

こうした問題に対処していくための分析の枠組みとして、日本社会においてはあまりなじみのない、観光やスポーツにおける階級性という論点が必要であるように思われる。ピクチャレスク・ツアーの参加者は、政治、社会、文化の諸局面において中心的な担い手として台頭しつつあった当時の中流市民階級であり、また、19世紀に入って山岳登山やスキー観光を楽しむためにスイスをはじめとしたアルプスに遠出し始めたのも、イギリス社会の富裕層の人々が中心であった。かくして、スイスが世界で初めて観光による経済立国を達成していった契機となったのは、富裕層のインバウンド観光であったことは間違いない。しかしながら、少なくとも北海道においては、スキーというスポーツは階級性の理念とは縁遠いものであると言えるのであり、そうした認識のギャップをまずはしっかりと確認する必要があると思われる。

その上で、ニセコ地区の今後の広域的な観光の可能性について検討する際には、200万人の人々が居住する大都市からも年間2000万人が利用する国際空港からも、ほぼ100キロ圏内に位置しており、絶好の雪質と十分な降雪および充実したアメニティという好条件が揃ったスキー場を有し、安全で清潔な生活環境のもとで、豊富な野菜・果物や肉・魚介類、世界に冠たるジャパニーズ・ウィスキー、地産ワイン、地酒、地ビールなどを楽しむことができるという恵まれた観光資源を、外在的視点を生かしながら経済的、社会的、文化的に価値づけ直してみることが求められていると思われる。

一方でまた、こうした広域的観光のための協働体制を構築するうえで肝要なのは、ニセコ地区を構成するひとつひとつの自治体や地域が経てきた歴史や、土地に刻まれた生活の記憶や物語に沿った形で、それぞれの場所が育んできた歴史や文化、地域的なアイデンティティを確認しつつ、一方でまたそれらを土台にして滲み出てくる特異的な文化や諸理念の違いについては、相互的な独自性を尊重して、ゆるくつながり協働することを基本的な方向に据えることであると思われる。

ニセコ地区の観光においても、特に情報環境の高度化という条件も加わって、広大なゲレンデに惜しみなく積もり降るアスピリン

スノーというイメージは、当初のオセアニアから東アジア、そして欧米へを急速に拡大しつつある。それに人と資本のグローバルな流動性の昂進が拍車をかけるようにして、さまざまな矛盾をはらみつつインバウンド観光が展開しているが、そうした状況に実践的な分析や考察を加える際にも、近代的観光の発展が内在させてきた、メディアと観光、階級と観光、大衆化およびその批判と観光といった側面におけるダイナミズムに目配りしてみることは意義深いものであると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

西川克之、イメージの呪縛を解くために美瑛における「観光のまなざし」の向こう側、CATS 叢書 11: 観光創造学へのチャレンジ、査読なし、第 11 号、2017、47-53

〔学会発表〕(計2件)

西川克之、訪う者の迎え方 - ニセコ地区における外国人旅行者への地域の対応二種、北海道大学メディア・コミュニケーション研究院主催「観光地域マネジメント論講座」10周年記念シンポジウム、2017年3月7日、北海道大学

西川克之、フォトレスクな風景 美瑛の丘の農村景観をめぐる、北海道大学/琉球大学観光研究ジョイント・ワークショップ、2016年2月5日、北海道大学メディア・コミュニケーション研究院

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西川 克之 (NISHIKAWA, Katsuyuki)

北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：00189268